

成八丁綱

播磨の聖人「龜山 雲平先生」を発掘する

第1回目

## 「龜山雲平の修学」

講演／毎 喜 毎 堂  
好 古 堂  
仁 寿 山 文  
昌 平 文

講師：龜山雲平鉏影会代表 長野 哲

日時：1月20日(日) AM 10:00~11:30

場所：城の西公民館2F会議室

城の西公民館だより(特集号)





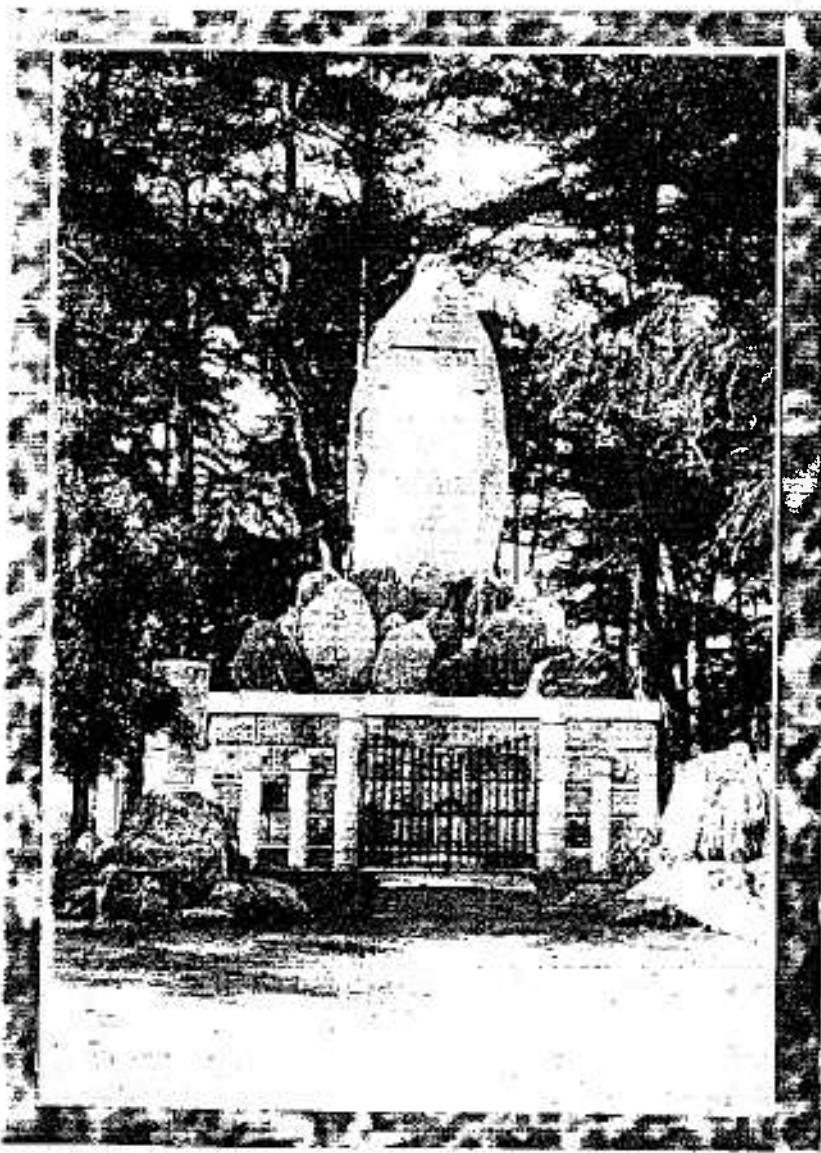
播磨聖人 龜山雲平翁 没後 百年祭記念 平成12年5月6日

播磨の三山



雲山三

山在正



碑蹟遺生先山龜宇節  
(行舉式幕除日六月七年四正大)

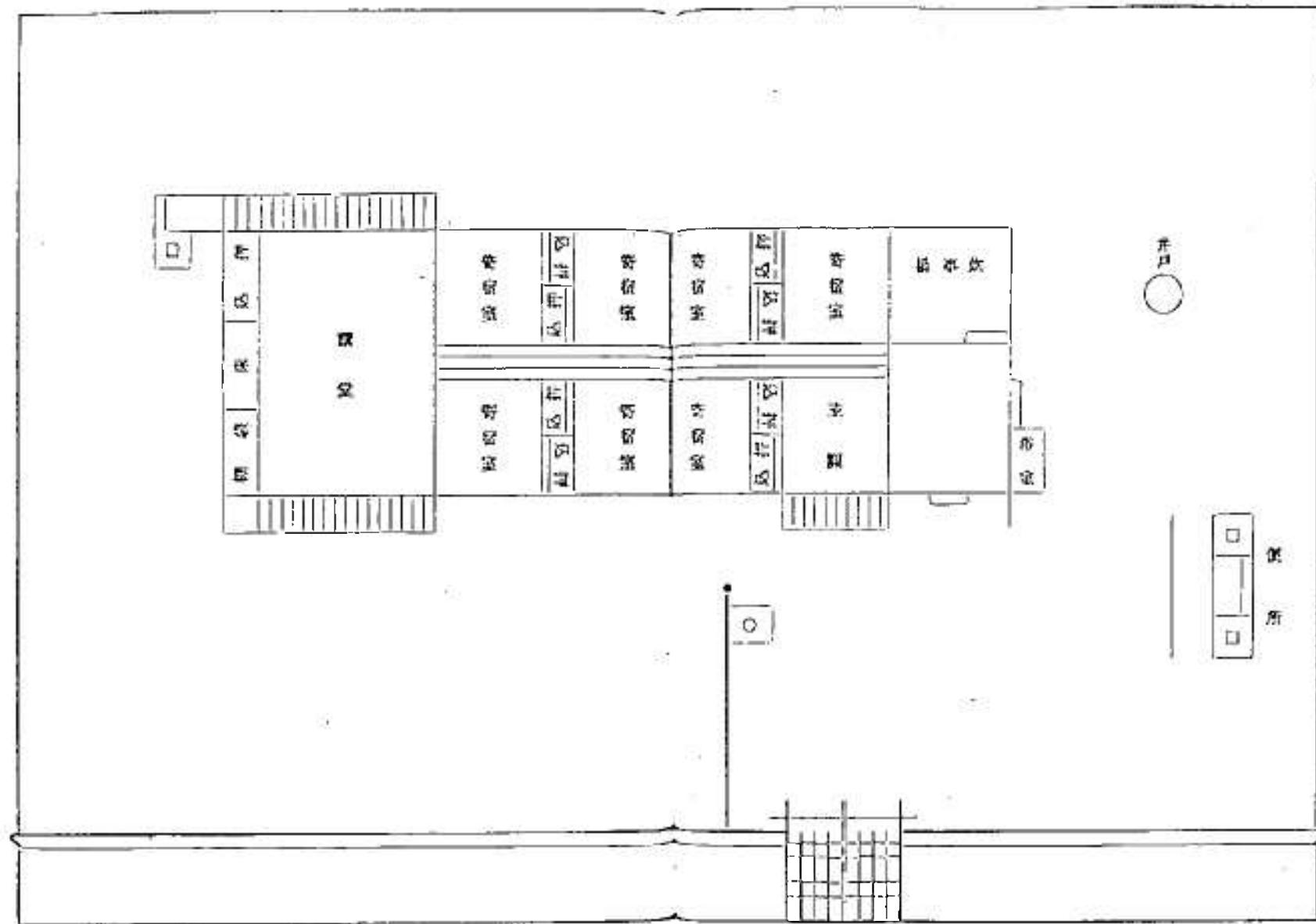


像肖生先山龜宇節

龍溪先生  
卷之三



觀 海 講 堂 略 圖



觀海講堂印人錄

觀海講堂

夜華社文以清

卷三十一



八九〇二三八年

庚寅二月大

火轉體

金言

金言

火轉

金言

火轉

金言

火轉

金言

火轉

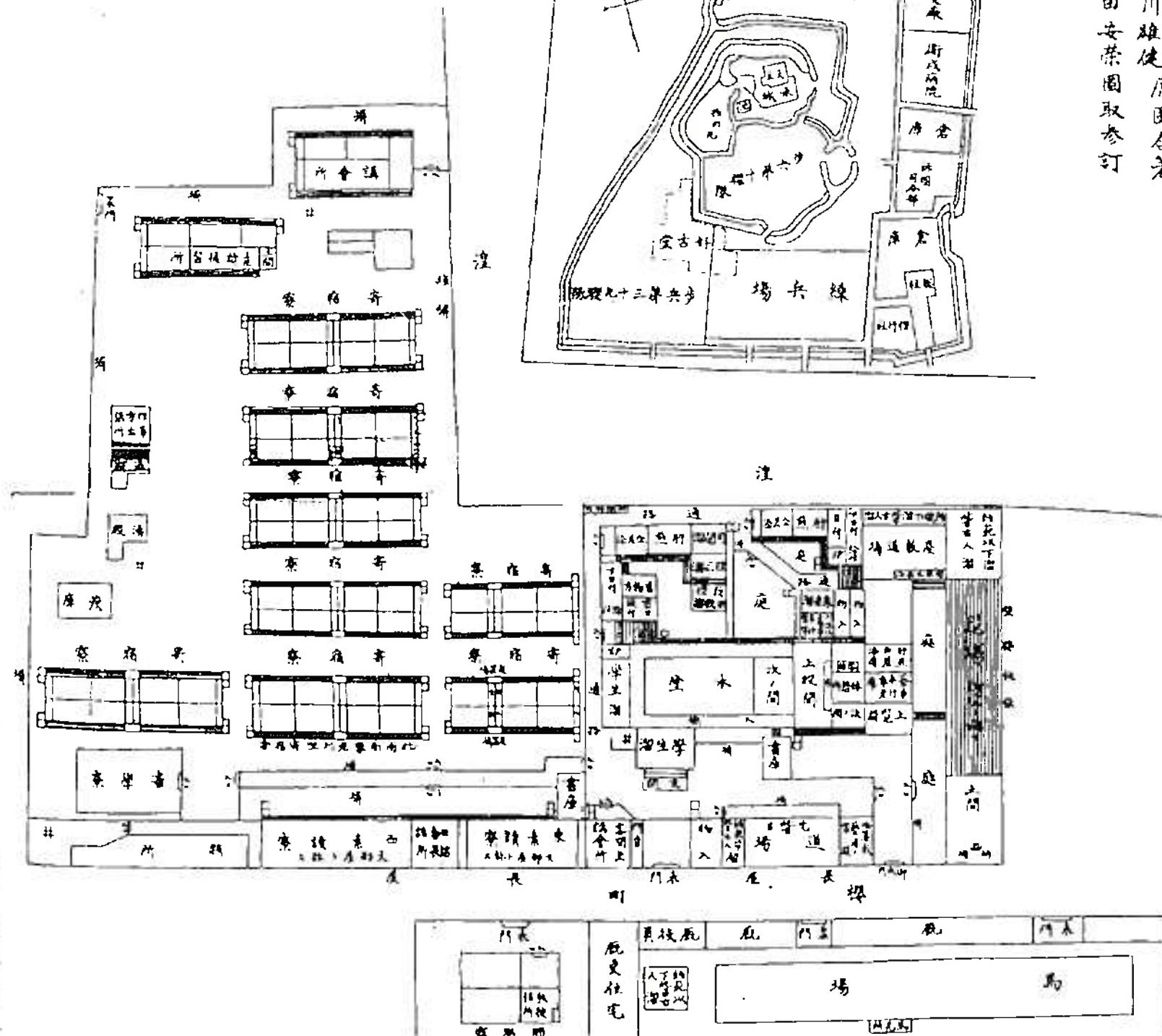
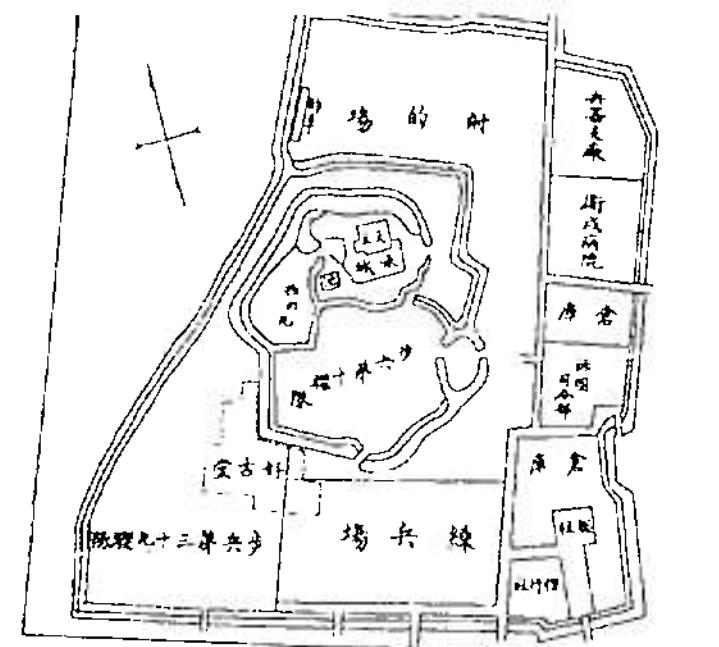
金言

通鑑卷一百一十一

門人錄

好古堂之圖

見島八尋  
砂川雄健原圖合著  
山田安榮圖取參訂



# 好古堂主教師

伊藤 蘰齋	名仲導、前橋以來教授安永二年侍講
那波 鮑堂	名師會、通稱主膳、一時教授
高濱 季文	通稱周輔、天明七年八月教授
石野 橋圓	名懋天明年中教授
高濱 樂齋	通稱省輔、文化十四年七月教授
堤 公禮	通稱鴻佐、文政十二年五月教授、仁壽山校兼勤
齋藤 守澄	通稱幾之進、文政年中教授
根岸 根處	通稱行藏、天保十二年教授
角田 楢園	通稱心藏、嘉永二年教授
秋元 安民	通稱正一郎、嘉永年中國學寮教授
渡邊 劣齋	通稱名璋、嘉永四年書學寮教授
菅野 白華	名潔、通稱狷介、嘉永年中教授、文久三年副督學、慶應元年督學兼勤
松平 棟山	名惇典、通稱孫三郎、嘉永年中督學
秋元 潤宇	通稱三郎兵衛、安政初年教授
多田 菊屏	通稱順平、安政初年教授
龜山 節宇	名美和、通稱敬佐、安政三年六月朔日教授、後文久三年十一月五日 大目付兼勤、後侍講
春山 弟彥	通稱欽次郎、文久三年七月國學寮教授
田島 藍水	通稱廉介、慶應年中教授
羽田省一郎	
竹末桧菟藏	
生形 周行	
伊奈 平八	
五十嵐清之介	
上月 豊蔭	
庭山 武正	
合田 麗澤	
近藤 抑齋	
篠崎庄之助	
宇津不寛居	
小屋 寄武	



文久二年	五月二十三日	芳賀靜七	世悴	出測久太郎	中村長歲	中村	出測	芳賀靜七	十一歲
文久二年	十月二十三日	渡部重藏	世悴	渡部重三郎	太田平三郎	太田	經藏	太田彦弥	十五歲
文久二年	十一月三日	折井赤右衛門	整	折井半藏	下田武士郎	下田	高馬	松崎斧弥	十九歲
文久二年	十二月八日	岩松九右衛門	孫	岩松補三郎	大谷次郎	大谷	半藏	岡田傳次兵衛	二十歲
文久二年	十二月十四日	植松佐一郎	世悴	植松角三郎	植松重三郎	植松	十七歲	芳賀靜七	二男
文久二年	十二月八日	出測新兵衛	三男	大谷那八	大谷那八	大谷	半藏	原源一	孫
文久二年	十二月八日	阿田左衛門	世悴	熊谷哲之助	熊谷哲之助	熊谷	十九歲	鉢木作次	世悴
文久二年	十二月八日	大谷次郎	太郎世悴	町田久次郎	町田久次郎	町田	十歲	小林信兵衛	世悴
文久二年	十二月八日	熊倉彦三郎	世悴	大澤照次郎	大澤照次郎	大澤	十一歲	堀越平兵衛	孫
文久二年	十二月八日	阿田左衛門	世悴	齊田盛威	齊田盛威	齊田	十一歲	深本三百石	世悴
文久二年	十二月八日	大澤為助	孫	大澤	大澤	大澤	九歲	岡田信兵衛	世悴
文久二年	十二月八日	宮地久左衛門	世悴	宮地久司	宮地久司	宮地	十歲	岡田傳次兵衛	男
文久二年	十二月八日	大槻傳	左衛門	大橋親吉	大橋親吉	大橋	十歲	芳賀靜七	二男
文久二年	十二月八日	後藤七左衛門	二男	後藤孝次郎	後藤孝次郎	後藤	九歲	原伸藏	孫
文久二年	十二月八日	牛込次太夫	五男	牛込甘四郎	牛込甘四郎	牛込	十一歲	鉢木雄次	孫
文久二年	十二月八日	白倉文左衛門	三男	白倉常次郎	白倉常次郎	白倉	十一歲	小林信兵衛	孫
文久二年	十二月八日	間原寛右衛門	四男	朝日奈夫吉	朝日奈夫吉	朝日奈	十歲	堀越又之丞	孫
文久二年	十二月八日	間原寛右衛門	四男	増田辰之助	増田辰之助	増田	十二歲	小林信太郎	十二歲
文久二年	十二月八日	塙田友之丞	介	竹内頴	竹内頴	竹内	十一歲	塙本口之丞	十二歲
文久二年	十二月八日	勅使河原五郎	四男	塙田文次郎	塙田文次郎	塙田	十二歲	岡田留次郎	十二歲
文久二年	十二月八日	朝比奈権次	弟	沼田萬吉	沼田萬吉	沼田	十一歲	岡田物次	十二歲
文久二年	十二月八日	增田是蔵	三男	酒井又七郎	酒井又七郎	酒井	十一歲	芳賀荒次郎	十九歲
文久二年	十二月八日	竹内係右衛門	世悴	石川松二	石川松二	石川	十四歲	高木猪介	世悴
文久二年	十二月八日	沼田甚二郎	世悴	石川	石川	石川	九歲	五代又七	世悴
文久二年	十二月八日	朝比奈権次	弟	新井道右衛門	新井道右衛門	新井	十二歲	高多準三郎	十二歲
文久二年	十二月八日	増田是蔵	三男	新井惣	新井惣	新井	十四歲	喜多準三郎	十二歲
文久二年	十二月八日	塙田友之丞	介	松下綱右衛門	松下綱右衛門	松下	十二歲	中村長歲	十一歲
文久二年	十二月八日	赤石助右衛門	發子	赤石	赤石	赤石	十二歲	中村良歲	十一歲
文久二年	十二月八日	境野義壽	孫	境野象之助	境野象之助	境野	九歲	中村良歲	十一歲
文久二年	十二月八日	梅津金八世悴		梅津榮太郎	梅津榮太郎	梅津	十二歲	中村良歲	十一歲
文久二年	十二月八日	芦谷源七	世悴	芦谷幾一郎	芦谷幾一郎	芦谷	十三歲	中村良歲	十一歲
文久二年	十二月八日	佐治八兵蔵	二男	佐治八男二	佐治八男二	佐治	十三歲	中村良歲	十一歲
文久二年	十二月八日	杉山次郎	兵衛甥	杉山熊次郎	杉山熊次郎	杉山	十六歲	中村良歲	十一歲
文久二年	十二月八日	丹羽孫助	世悴	丹羽類	丹羽類	丹羽	九歲	中村良歲	十一歲
文久二年	十二月八日	龍藏門右衛門	世悴	龍藏門右衛門	龍藏門右衛門	龍藏	十一歲	中村良歲	十一歲
文久二年	十二月二十一日	丹羽孫助	世悴	丹羽類	丹羽類	丹羽	十一歲	中村良歲	十一歲
文久二年	六月二十七日	杉山次郎	兵衛甥	杉山熊次郎	杉山熊次郎	杉山	十六歲	中村良歲	十一歲
文久二年	七月二十一日	丹羽孫助	世悴	丹羽類	丹羽類	丹羽	九歲	中村良歲	十一歲
文久二年	六月二十七日	龍藏門右衛門	世悴	龍藏門右衛門	龍藏門右衛門	龍藏	十一歲	中村良歲	十一歲
文久二年	八月二十七日	丹羽孫助	世悴	丹羽類	丹羽類	丹羽	九歲	中村良歲	十一歲
文久二年	十月二十一日	宇野巳之助	世悴	宇野巳之助	宇野巳之助	宇野	十一歲	中村良歲	十一歲
文久二年	十一月二十一日	古市穂之進	孫	古市兵庫郎	古市兵庫郎	古市	十一歲	中村良歲	十一歲
文久二年	十一月二十一日	伊良子庄之助	世悴	伊良子	伊良子	伊良子	十一歲	中村良歲	十一歲
文久二年	十一月二十一日	高氣隼人	二男	高氣隼人	高氣隼人	高氣	十一歲	中村良歲	十一歲
文久二年	十一月二十一日	本多平十郎	孫	本多平十郎	本多平十郎	本多	十一歲	中村良歲	十一歲
文久四年	甲子正月十二日	秋元鶴之助		秋元鶴之助	秋元鶴之助	秋元	十一歲	中村良歲	十一歲
文久四年	十一月十七日	高須鶴之助	二男	高須鶴之助	高須鶴之助	高須	八歲	中村良歲	十一歲
文久四年	十一月二十五日	高須鶴之助	二男	高須鶴之助	高須鶴之助	高須	八歲	中村良歲	十一歲
文久四年	十一月二十一日	本多平十郎	孫	本多平十郎	本多平十郎	本多	十一歲	中村良歲	十一歲
文久四年	十一月二十一日	伊良子	十一歲	伊良子	伊良子	伊良子	十一歲	中村良歲	十一歲
文久四年	十一月二十一日	入門	入門	入門	入門	入門	入門	入門	入門
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									
文久四年十一月二十一日									

森時右衛門	一男	出削	森 邪三郎	十一歲
山湖久太郎	二男	有馬	有馬 魁吉	十歲
龟井無一郎	一男	龟井	小林成之助	八歲
小林成左衛門	男	下田	下田 文兵衛	五歲
五十嵐辰右衛門	二男	市橋	市橋伊勢之丞	五歲
岡野堅次郎	二男	岡野	岡野堅次郎	五歲
山瀬宣右衛門	四男	山瀬	山瀬宣右衛門	五歲
下田文兵衛	五男	下田	下田 五郎	五歲
有馬鑑一郎	一男	有馬	有馬 魁吉	六歲
小林成左衛門	男	小林	小林成之助	八歲
龟井無一郎	一男	龟井	五十嵐彦三	六歲
森時右衛門	一男	森	中津倉太郎	十二歲
中根純堂	世梓	中根	中根 錄次郎	十四歲
武井虎之助	世梓	武井	武井仙太郎	十四歲
渡部圭助	厄介	渡部	渡部五十吉	十二歲
安藤助太夫	二男	安藤	安藤善之助	十一歲
小金井伊作	孫	小金井	小金井鉄次	十三歲
本間金之助	世梓	本間	本間圭四郎	十三歲
荒木寛之助	養子	荒木	村田	二十歲
宇野左馬	世梓	宇野	村田 錄節	二十歲
五十嵐源之助	世梓	五十嵐	本間圭四郎	二十歲
細井市太夫	孫	細井	本間圭四郎	二十歲
高岡武次右衛門	孫	高岡	武一	二十歲
小林小左衛門	孫	小林	小林長四郎	十二歲
青木龜藏	二男	青木	桂二	十二歲
鈴木北右衛門	二男	鈴木	辰次	十三歲
奥野八十之助	弟	奥野	良之助	十歲
三堀巳之八	弟	三堀	五十嵐卓弥	十一歲
手島熊五郎	世梓	手島	五十嵐安之丞	十一歲
豊岡森八	世梓	豊岡	五十嵐安之丞	十一歲
高橋山左衛門	世梓	高橋	五十嵐辰次	十一歲
青木孫八	孫	青木	桂二	十一歲
本多平十郎	孫	本多	桂二	十一歲
鶴谷市之進	二男	鶴谷	辰次	十一歲
新井清右衛門	四男	新井	辰吉	十一歲
根岸次右衛門	男	根岸	辰吉	十一歲
伊藤丈左衛門	但津	伊藤	辰吉	十一歲
梅津金八	二男	梅津	辰六	十一歲
石川金次郎	二男	石川	唯次	十一歲
大山久米進		大山	久米進	十一歲
伊藤十四太郎		伊藤	吉次	十一歲
篠原重次郎		篠原	吉次	十一歲
高須彦八	世梓	高須	力磨	十二歲
池谷辰右衛門	三男	池谷	成次	十二歲
山田整右衛門	子	山田	延太郎	十二歲
高野一郎右衛門	弟	高須	隼之助	十二歲
青木平藏	世梓	青木	盛三郎	十二歲
高須五兵衛	男	高須	数次	十二歲
高橋勇右衛門	兄弟	高橋	右佐次	十二歲
上田左太夫	世梓	上田	傳一郎	十二歲

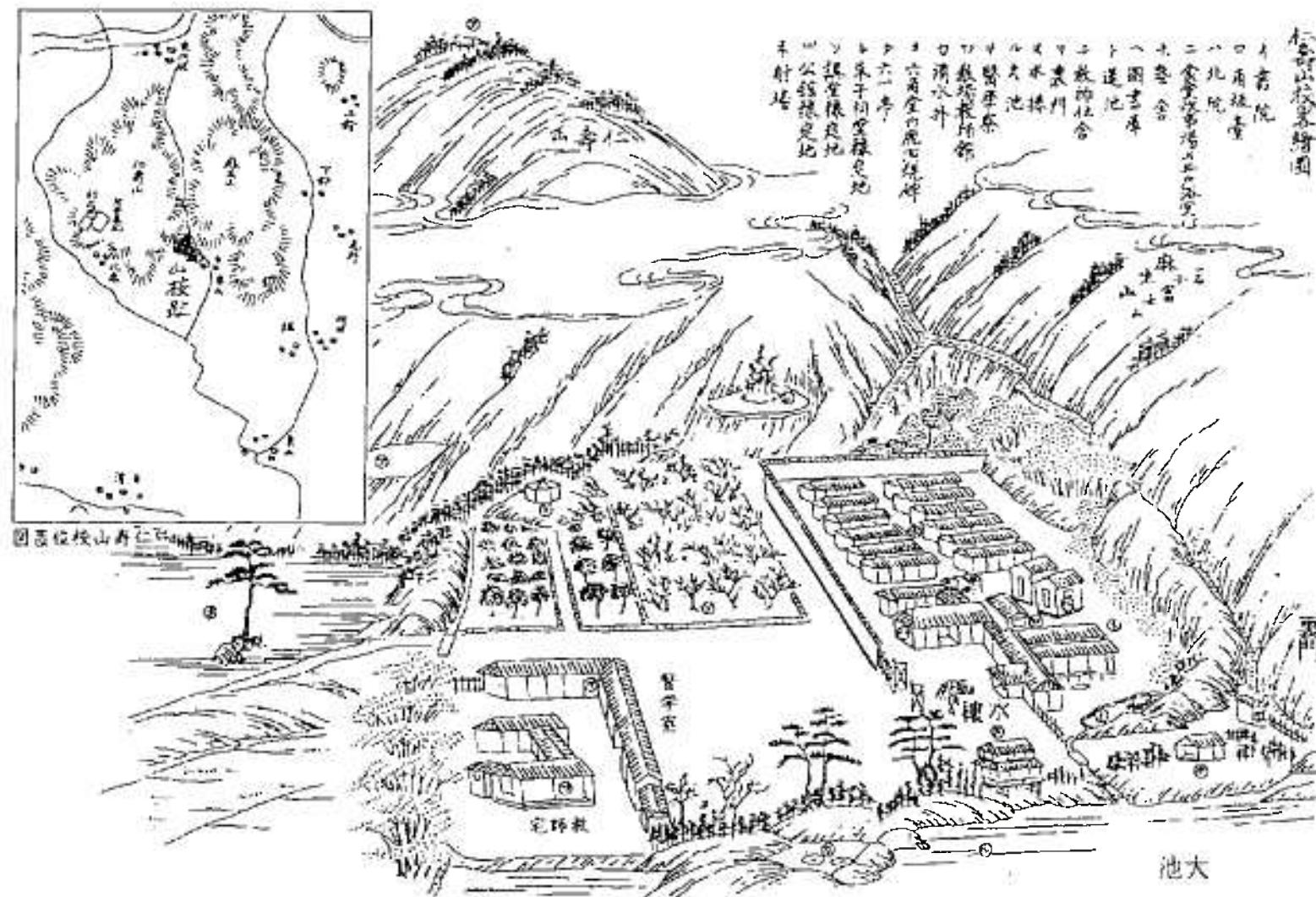


图1 仁寿山校略總圖(下田天香·明治四十三年)

萬鶴路大藩夫河合道臣肖之像

集賞圖

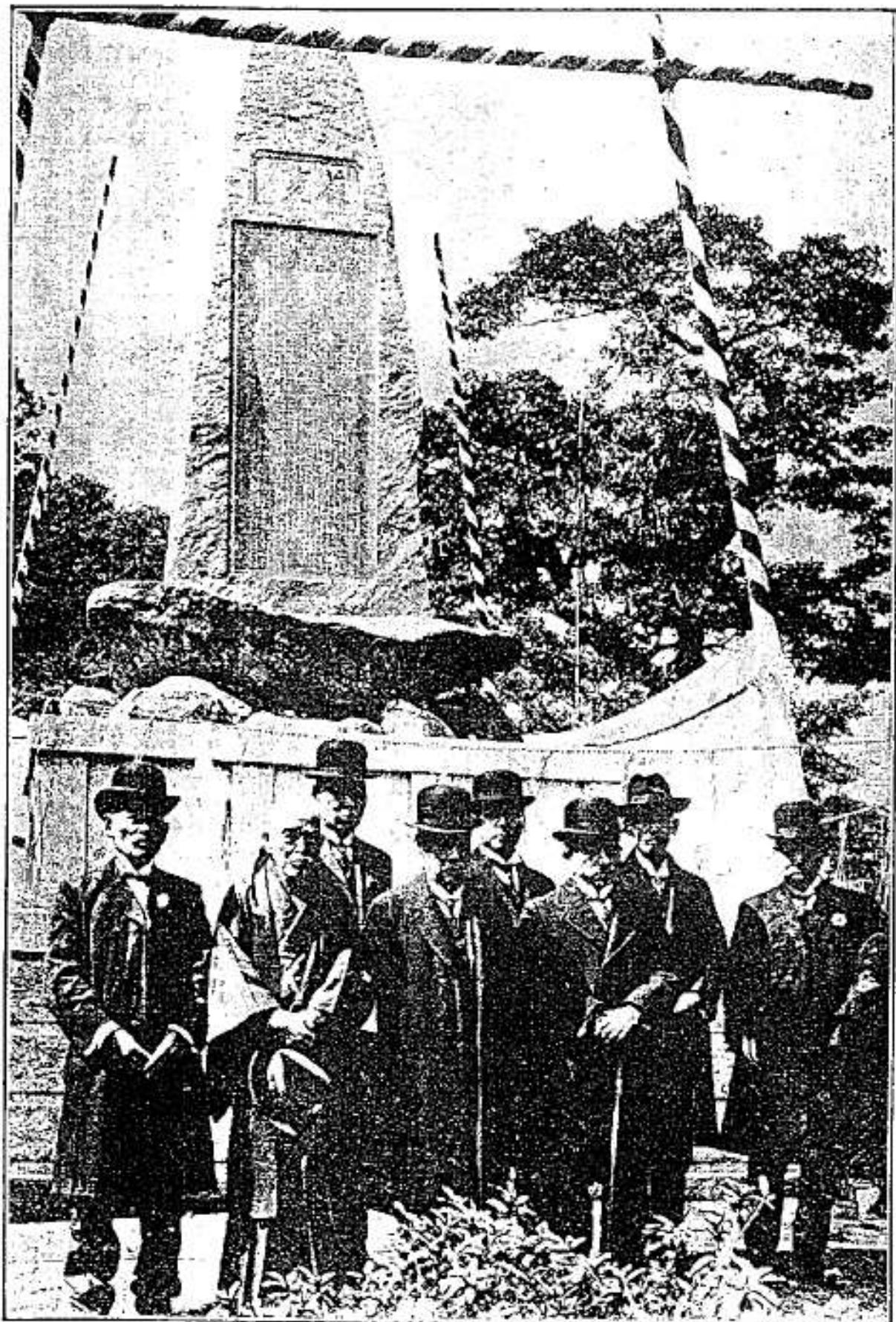


# 仁壽山學問所紀念碑

仁壽山校址碑

伯爵酒井忠正撰

姫路藩大夫河合寸翁余が先世忠道忠實二君ノ信任ヲ受ケ藩政釐革ノ衝ニ膺リ功績甚ダ多シニ君之ヲ褒シ文政二年祿ヲ増シ且ツ特ニ城ノ東南阿保坂元奥山北原兼田諸村ノ山林ヲ賜ヒテ燕息ノ處ト爲サシム仁壽山是ナリ寸翁以爲ヘラク教化ヲ興シ人材ヲ得ルハ今日ノ急務トス此ヲ以テ恩ニ報ユベキナリト乃チ私財ヲ捐テ山南ノ一區ヲトシテ校舎ヲ創設ス書院塾舍書庫教場教師館醫學寮等ノ諸堂宇六一亭六角堂白鹿洞規碑等アリ又朱子祠堂公館等ノ地ヲ豫定セリ其學制ハ大學頭林述齋ノ指導ヲ仰キ近藤抑齋菅野松鴻ヲ舉ゲテ督學トナシ汎ク藩内外ノ子弟ヲ收容ス猪飼敬所賴山陽摩島松南等ノ碩儒來リ講ジ育英ノ業日ニ進ム仁壽山校ノ名四方ニ聞エテ藩學好古堂ト相駢馳セリ天保十二年寸翁逝キテ後校運漸ク衰ヘ藏書什器ノ類率ネ好古堂ニ移管セラレ山校遂ニ廢ス今ヤ當年ノ校舍泉石皆湮滅シテ復観ル可カラズ獨市川ノ清流瑩然トシテ山麓ヲ繞リ白鷺ノ城樓分明雲際ニ聳ユルアルノミ今茲舊藩士民ノ有志相謀リ寸翁頌德ノ碑ヲ姫山公園ニ建ツ又此碑ヲ山校ノ遺址ニ置キ以テ其勳業ヲ不朽ニ傳フト云フ



寸 爵 夫 頌 德 碑

向テ右ヨリ 梶會計係 西村東京委員 酒井伯爵 藤岡理事官 武井男爵 河合外吉氏 矢内史議會長 杉山市長

## 仁壽山靈祭趣意書

暮末或郷土の大先覺河合大夫は故つて抜立せられた仁壽山靈の石は、夙に明治維新文中より其名若れ、又に岐阜州子弟の有成に供せられたるのみならず又廣く天下の志士學者を迎へて當時に於ける國士の道場となり、其學風は極めて「宗國天下に貢獻する所又甚しくなかつた」樹はらず、今や星霧參つて其の蹟跡々荒廢に歸して居る事は、實に心有る士の齊しく遺憾に堪へざり所である。

由來、人情の厚出は其の即次の人情關心、英華皆人に對する私淑客様と、幼時より百丈れ來つた郷土の山川風物の感化にて然る所が多い。然るに岐阜市を中心とする我攝州人は、古來攝州に人物無くその甚大輕率なる先入観念があり、從つて漫刺たるゝ少青年時代にも常に感激風力なく、折角の逸材も長年もに從つて凡化し云々の姿へ變無とは謂ひ得ぬ。

故に於て、郷土を愛し郷土を興すことを其の心得の一として奮進すべき事を誓へる不肖等名教會同人は、此誠士れる鄉風の打開を期して、仁壽山靈の學風を傳へ、との精神的復興を志し、恰も文政四年河合大夫が藩政整理の功に依り罪公の後哲を立てて門保山の一里北仁壽山靈を開いたる三月十四日（舊曆正月二十五日）及翌三月十一日壬午、仁壽山靈祭を催し同靈主贈從四位守翁河合隼之助宗元大夫の靈を祭り、郷土後輩の至誠を致すと共に我愛する郷土子弟の將來の寄與する所あるを祝れば欣快之れに昭示す爲し、別號仁壽山靈祭計劃書甚く先づかゝる學を為す所以である。茲くは郷土先輩各位、不肖等同人の志を諒せられ御遺稿を賜らむことを。

昭和九年二月下浣

姫路名教會

一 鮎島郡木引村奥山字奥谷  
一 畑 七丈二段拾四步  
二 雜地 四丈三段拾四步  
合計 一町一丈四段二十八步

（三、四七八坪）

# 仁壽山靈祭計劃書

## 一、祭典

(一) 日 時 昭和九年二月十一日午前正十時

(二) 墓所 仁壽山靈（兵庫縣飾磨郡多村與山所）

(三) 式 祭典八神十二依リ靈母八

(四) 參列者 本靈親間以下名義會々員其ノ他有志

參列者一同所於ラ旗飯ヲ俱ニシタル後午前九時頃キ姫路市公會堂ニ於テ

奉納武道一行ノ

## 二、武道奉納之儀

(一) 日 時 昭和九年二月十一日午後正二時

(二) 墓所 姫路市八音堂

(三) 武道 藤霜園蕃私御道場起流秋濱

## 基本試合

國民式道合 那観 萩山喜六先生

兵庫縣警監督所武道教師 乙葉春雄先生 外官會同人

## 學童試合

市内小學校學童代表選拔試合

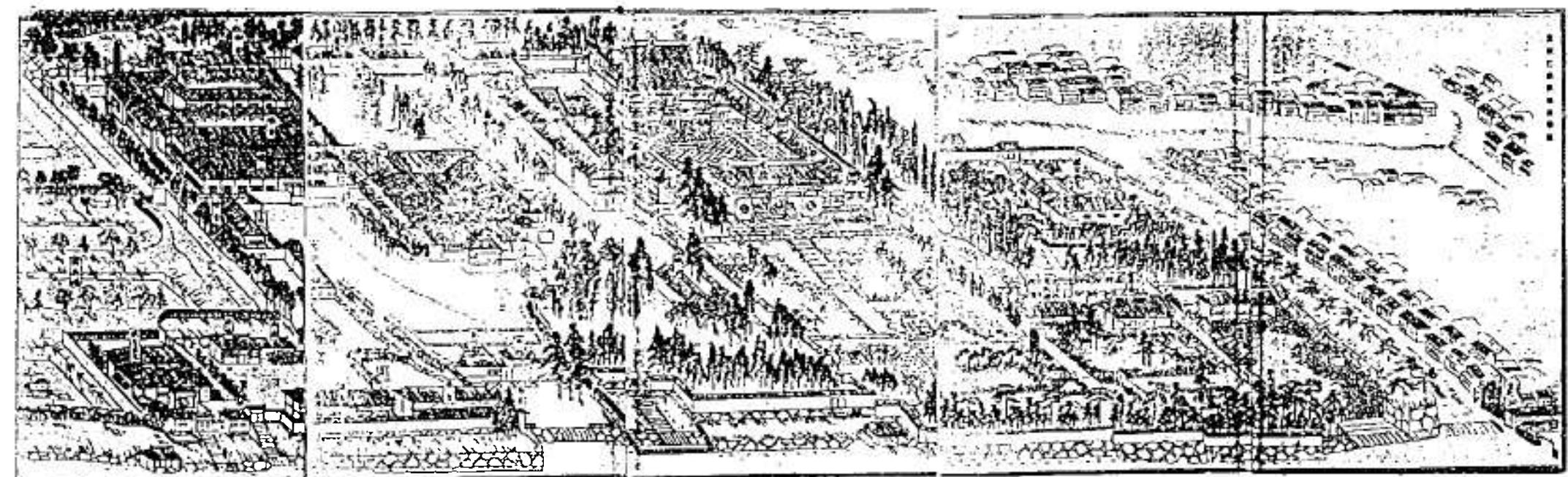
## 三、武道・射箭試合

### (四) 射道・射箭試合

古事記武道於了能郡下小學就兒童並青年訓練所生中射道終然者ニ對シ射道免許狀授與式ヲ行フ

(五) 參列者 來賓其名試合々見附係各並青年訓練所生其ノ他有志

所生其ノ他有志



幕府官学昌平校の絵図（寛政十一年改築当時のもの）

寛政十一年十月、幕府は大成殿を大規模に新築した。また前年より幕府直轄の昌平坂学問所を開いた。この建物の用材は堅実、構造は精緻で、久しく泊りの假説であったが、大正十二年の大震火災で入徳門・水屋のみを残して全焼した。しかし今の殿堂の様式は、すべてこの当時のものに拘る。

佐藤一齋肖像

門人渡邊舉山筆

河田烈氏藏



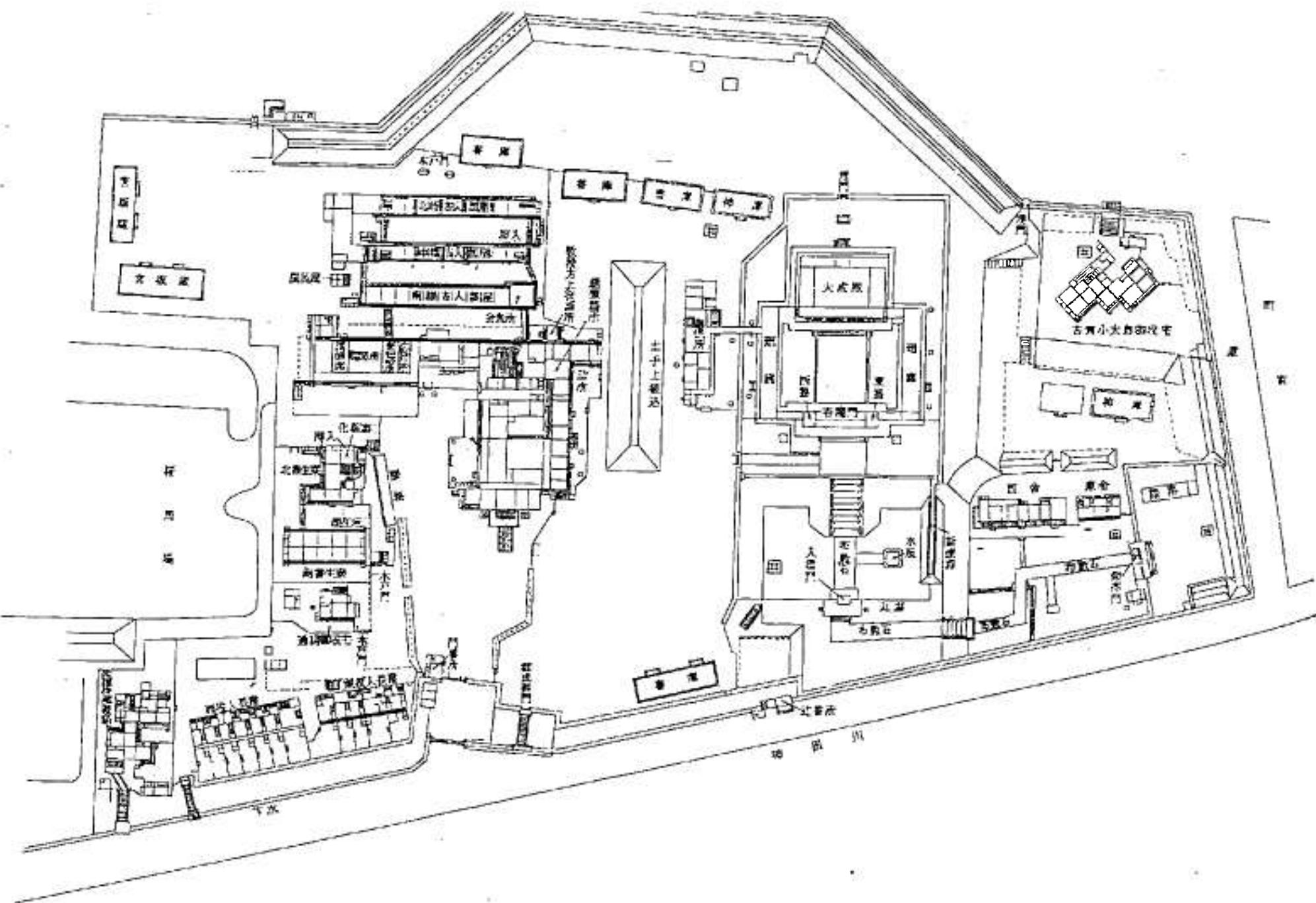
一齋假我名號可也一齋  
不以重譲予能執毫忽其似  
矣不以高穎之素所從大而  
之外有神也是神乎否不微  
乎古之無名川後勝而星辰  
原名風急轉轍中隱微不  
言不自立存也海制中山林  
古方嘗作也予見其行如太  
祖語此我真矣予故  
了中長夏上時之

平生之奇蹟



東京教育博物館所蔵

聖堂講釋の圖



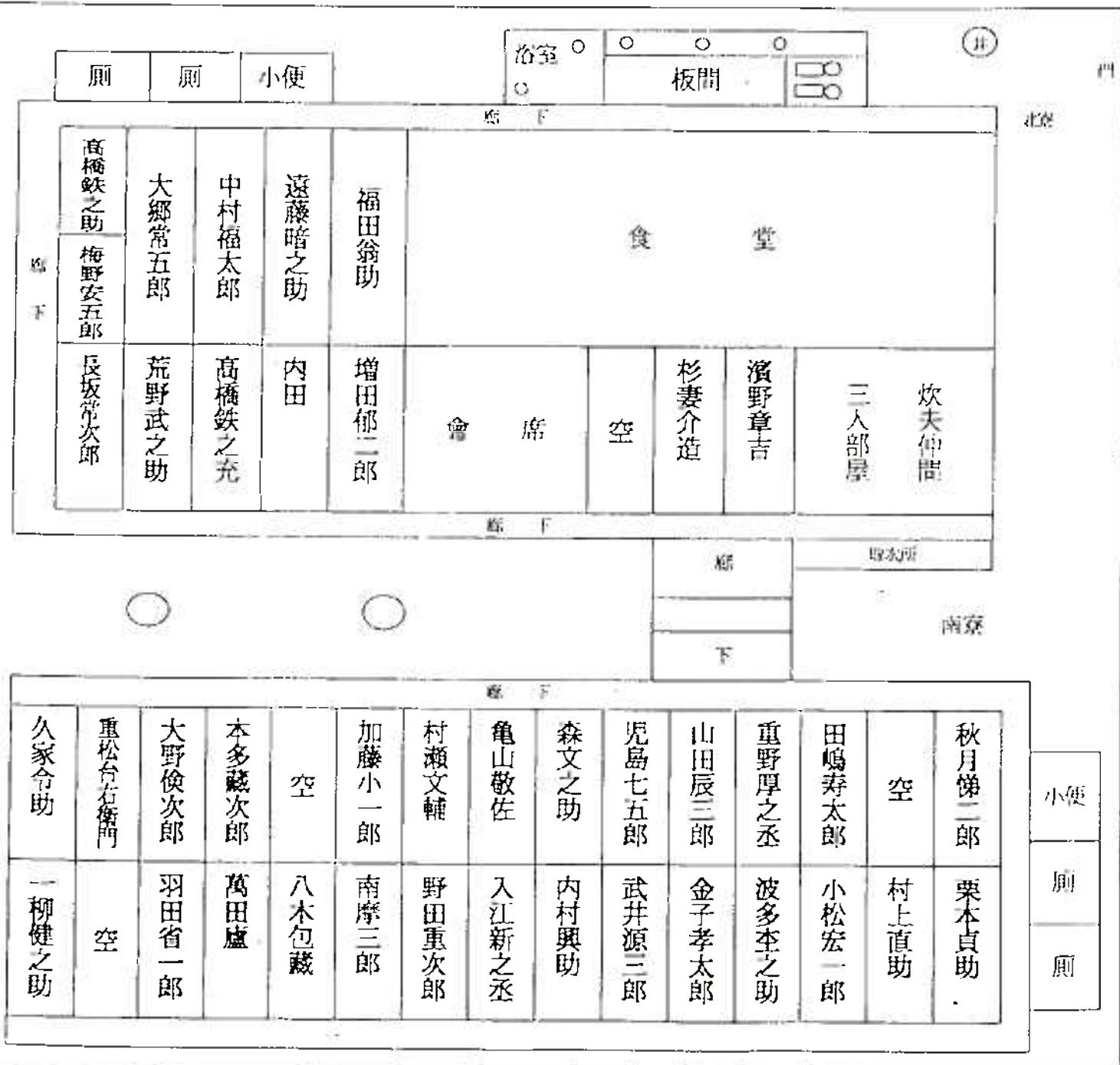
昌平坂学問所絵図

嘉永四年五月現在の書生寮の図

聖堂畫生察之圖

南察八畳北察六畳

四十四人ヲ以満察ト定ム  
今四十人入察ノ書生有



批評諸家輯錄

不詳年大略之目

批評諸家例以號稱之號不詳則以字稱之字亦不明則始稱名而其人多係節字先生江戸昌平癸三空諸友

高 雨舟

原名龍子号人

○菅野白華

原名望子正興號白華

○重野成齊

原名安良子口通雅長之號又厚之號

○高橋飯山

原名源裕字有齋在近山又古風異稱

○原仲寧

原任字仲寧號不復齊風古之號

○岡鹿門

原名平松字榮次風雅者稱

上田貞

原名政美字子良之號

水本樹堂

原名政美字子良之號

三浦雷堂

原名雷一氏正字公直號

都築漁齋

原名行高一名都築字士方豐原大號

○安積艮齋

原名代二本代正字公直號

生形虛堂

原名行高一名生形字士方豐原大號

○南摩羽峯

原名羽峯會津人

森深谷

原名中也字次茂號深谷

相良鷹里

原名鷹里又人

○土屋鳳洲

原名鳳洲和良入

○松本奎堂

原名百子好基號三郎

木原源里

原名源里又人

○金子三石

原名三石字正義號章太郎

多田菊屏

原名菊屏

○木原老谷

原名元豊字可夫號老谷

○長梅外

原名九天字吉丈號外又西白

○岡崎億山

原名又昌

○山田筑浦

原名筑浦久次號人

○津田通菴

原名通菴字公風號通三郎

○松平桂山

原名桂山字人

○増田松塲

原名松塲

○多田菊屏

原名菊屏

○高 雨舟

原名龍子号人

○菅野白華

原名望子正興號白華

○重野成齊

原名安良子口通雅長之號又厚之號

○高橋飯山

原名源裕字有齋在近山又古風異稱

○原仲寧

原任字仲寧號不復齊風古之號

○岡鹿門

原名平松字榮次風雅者稱

上田貞

原名政美字子良之號

水本樹堂

原名政美字子良之號

三浦雷堂

原名雷一氏正字公直號

都築漁齋

原名行高一名都築字士方豐原大號

○安積艮齋

原名代二本代正字公直號

生形虛堂

原名行高一名生形字士方豐原大號

○南摩羽峯

原名羽峯會津人

森深谷

原名中也字次茂號深谷

相良鷹里

原名鷹里又人

○土屋鳳洲

原名鳳洲和良入

○松本奎堂

原名百子好基號三郎

木原源里

原名源里又人

○金子三石

原名三石字正義號章太郎

多田菊屏

原名菊屏

○木原老谷

原名元豊字可夫號老谷

○長梅外

原名九天字吉丈號外又西白

○岡崎億山

原名又昌

○山田筑浦

原名筑浦久次號人

○津田通菴

原名通菴字公風號通三郎

○松平桂山

原名桂山字人

○増田松塲

原名松塲

○多田菊屏

原名菊屏

○高 雨舟

原名龍子号人

○菅野白華

原名望子正興號白華

○重野成齊

原名安良子口通雅長之號又厚之號

○高橋飯山

原名源裕字有齋在近山又古風異稱

○原仲寧

原任字仲寧號不復齊風古之號

○岡鹿門

原名平松字榮次風雅者稱

上田貞

原名政美字子良之號

水本樹堂

原名政美字子良之號

三浦雷堂

原名雷一氏正字公直號

都築漁齋

原名行高一名都築字士方豐原大號

○安積艮齋

原名代二本代正字公直號

生形虛堂

原名行高一名生形字士方豐原大號

○南摩羽峯

原名羽峯會津人

森深谷

原名中也字次茂號深谷

相良鷹里

原名鷹里又人

○土屋鳳洲

原名鳳洲和良入

○松本奎堂

原名百子好基號三郎

木原源里

原名源里又人

○金子三石

原名三石字正義號章太郎

多田菊屏

原名菊屏

○木原老谷

原名元豊字可夫號老谷

○長梅外

原名九天字吉丈號外又西白

○岡崎億山

原名又昌

○山田筑浦

原名筑浦久次號人

○津田通菴

原名通菴字公風號通三郎

○松平桂山

原名桂山字人

○増田松塲

原名松塲

○多田菊屏

原名菊屏

○高 雨舟

原名龍子号人

○菅野白華

原名望子正興號白華

○重野成齊

原名安良子口通雅長之號又厚之號

○高橋飯山

原名源裕字有齋在近山又古風異稱

○原仲寧

原任字仲寧號不復齊風古之號

○岡鹿門

原名平松字榮次風雅者稱

上田貞

原名政美字子良之號

水本樹堂

原名政美字子良之號

三浦雷堂

原名雷一氏正字公直號

都築漁齋

原名行高一名都築字士方豐原大號

○安積艮齋

原名代二本代正字公直號

生形虛堂

原名行高一名生形字士方豐原大號

○南摩羽峯

原名羽峯會津人

森深谷

原名中也字次茂號深谷

相良鷹里

原名鷹里又人

○土屋鳳洲

原名鳳洲和良入

○松本奎堂

原名百子好基號三郎

木原源里

原名源里又人

○金子三石

原名三石字正義號章太郎

多田菊屏

原名菊屏

○木原老谷

原名元豊字可夫號老谷

○長梅外

原名九天字吉丈號外又西白

○岡崎億山

原名又昌

○山田筑浦

原名筑浦久次號人

○津田通菴

原名通菴字公風號通三郎

○松平桂山

原名桂山字人

○増田松塲

原名松塲

○多田菊屏

原名菊屏

○高 雨舟

原名龍子号人

○菅野白華

原名望子正興號白華

○重野成齊

原名安良子口通雅長之號又厚之號

○高橋飯山

原名源裕字有齋在近山又古風異稱

○原仲寧

原任字仲寧號不復齊風古之號

○岡鹿門

原名平松字榮次風雅者稱

上田貞

原名政美字子良之號

水本樹堂

原名政美字子良之號

三浦雷堂

原名雷一氏正字公直號

都築漁齋

原名行高一名都築字士方豐原大號

○安積艮齋

原名代二本代正字公直號

生形虛堂

原名行高一名生形字士方豐原大號

○南摩羽峯

原名羽峯會津人

森深谷

原名中也字次茂號深谷

相良鷹里

原名鷹里又人

○土屋鳳洲

原名鳳洲和良入

○松本奎堂

原名百子好基號三郎

木原源里

原名源里又人

○金子三石

原名三石字正義號章太郎

多田菊屏

原名菊屏

○木原老谷

原名元豊字可夫號老谷

○長梅外

原名九天字吉丈號外又西白

○岡崎億山

原名又昌

○山田筑浦

原名筑浦久次號人

○津田通菴

原名通菴字公風號通三郎

○松平桂山

原名桂山字人

○増田松塲

原名松塲

○多田菊屏

原名菊屏

○高 雨舟

原名龍子号人

○菅野白華

原名望子正興號白華

○重野成齊

原名安良子口通雅長之號又厚之號

第三七表　弘永四年五月現在の吉生領在所者数

設の必要と効果に可かつて策を進めた。

學問所謂の法律へ向は  
體、舊承人の教育第一に仕  
り依に其、前々の如く諸國  
一浪人等に差し障かざる心

前は陪臣・浪人とも確実接するが、下され候。當時は全く厚志の者とも自分まかなひて入寮仕り候へば、まことに存じなり候。左院へは通

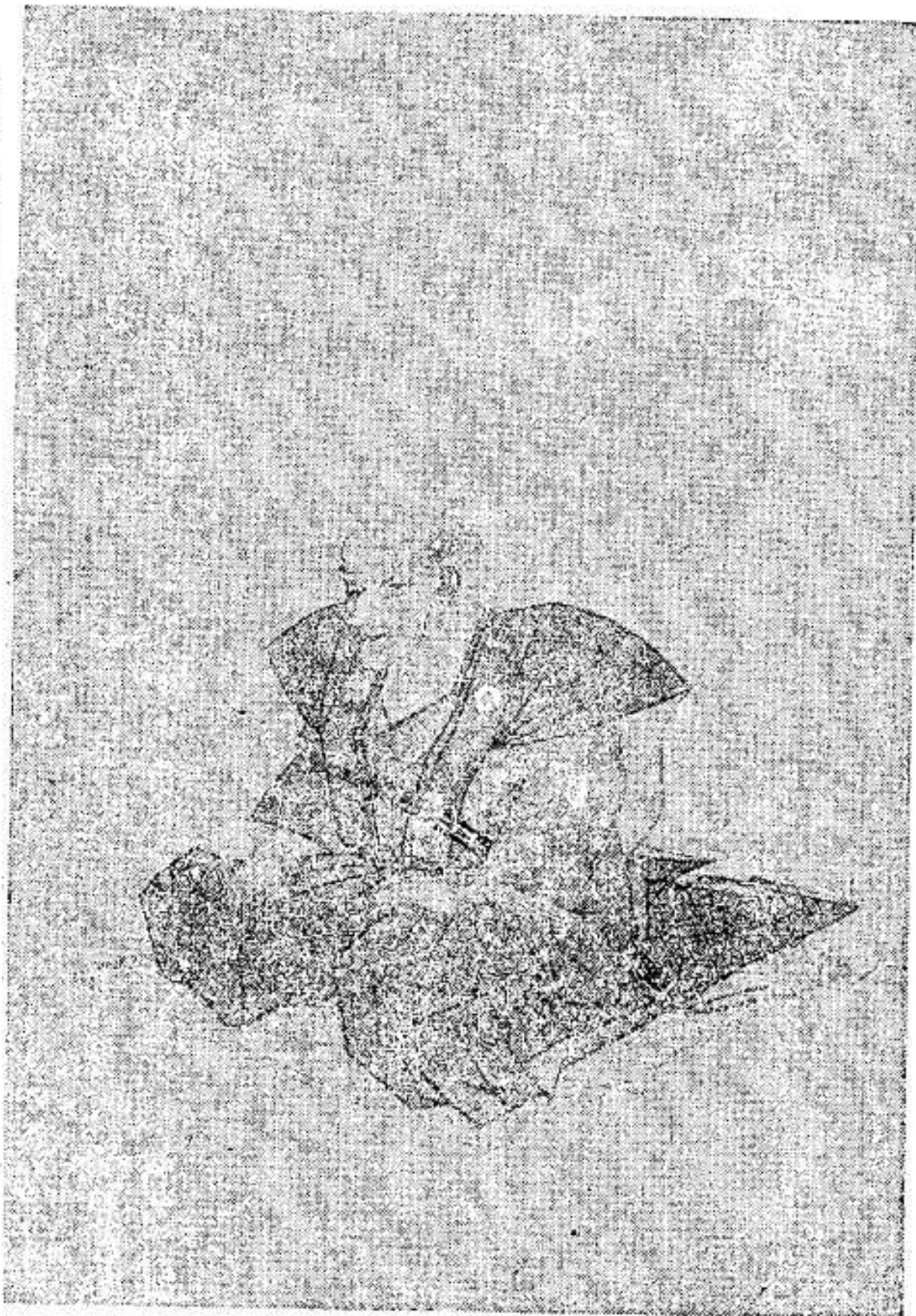
るところに存じ奉り候。  
この建議はただちにとり上げられ  
先生家の公報となり、その上

審査窓口のための備考であるが、  
一二〇人扶持の資本資糧の大  
半、二〇〇人扶持をもって審査

寮が実際に発足したのはどの建物があつてからまもないところであつたであろう。おそらく初代の全長であつたかと田

わざわざ大坂半身像をもつて、  
「せん、風向、清遊」が、西  
・中國へ向ひ、七夕口にわた  
る某の遊遊の路程に出かける  
ために、企長姓の願いを出  
したのは享和二年十一月(1802)  
のことであつた。してみると  
、この時にねずでに公宣の

書生寮が活動を開始したものと思われる。同じくこの寮のできたことで日本坂学園はまたさらなる一歩、諸君の優秀を集めて活字の教官を育成する最高学府の実をそなえたのである。



酒井忠道畫像（酒井家所藏）

—昭和26.8.20—

酒井家の祖先



酒井 兼 元



酒井忠邦



酒井 忠 悅



酒井 忠 駿

諸國名不表示

酒井 美意子さん(みいこ)か  
評論家、ハク  
ビ総合学院名  
学長(5日)  
午後2時55分、心不全のた  
め東京都新宿区若葉1の  
自宅で死去、73歳。東京  
出身。葬儀・告別式は9  
午後2時から新宿区南元町14  
の2、千日谷会堂で。喪主は  
長男忠紀(ただのり)氏。妻  
前田利為侯爵の長女として  
生まれる。戦後、エチケット  
などの評論家となり、自  
らの半生を書いた「ある族  
の昭和史」がベストセラ  
ーになるなど、文筆活動でラ  
ウマ自らの人生を継ぐ

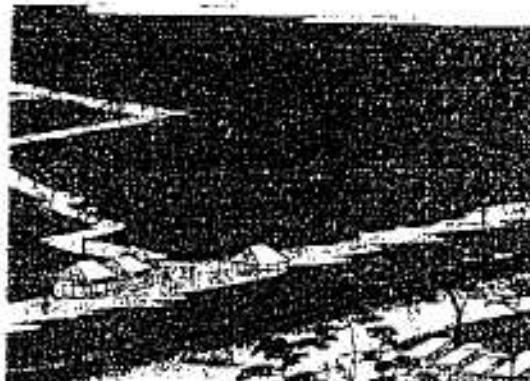


茅ヶ崎川橋

四百石の船橋を有する茅ヶ崎市(横浜市)は、江戸時代より利根川水系の河川網によって開拓された。茅ヶ崎市は、利根川水系の河川網によって開拓された。



諸國名不表示



茅ヶ崎川河口



本多正高



父石水新六



貴族院議員伊藤

古市公版



松香上井



守正其武



近藤寅

嘉永六年六月（一八五三）姫路藩兵、浦賀へ出陣した時の士卒の氏名

○  
服坪横大山大市立大小宮志吉佐狩中大堀杉峯大樋瀧奥春須梅牧粟森神鈴小丸  
部内山平岸谷川川島糸沢賀村久野村河江山村塚口澤山山田澤野飯田谷木林島  
惧甚大左 閨金官 岩間鐘原 捨宗 万鉄欽 七錠原浪半丑  
豊次一三衛權七之七官武源次 吉三熊波應惣次三岩五四次啓五平右銀三羊三  
次郎郎門次郎助郎助助次郎 五郎藏助次郎郎藏郎郎藏助助次郎郎郎助  
門

○  
龜秋植芳宇坂神宮重山山海井有三田中堀松諸小小武手岡堤角牛荒北小渡水高  
井元松賀野井戸澤田脇川老上馬浦中嶋口本葛野暮藤島本 田込木爪林部野橋  
出 平左久造酒莊惣大鑑沢弘又 三三釤次次乙平元金寛孝格 望臯又弥  
席源一一右鹿太兵左次之牧之三多之左一郎郎一之之右四之八弥友太五五七仲  
者吉郎郎衛衛平夫藏門助之進郎膳助衛郎助助郎進助衛郎助郎作弥郎郎郎藏  
門

一  
二鳥岡上大荒清伊松米金大本永木渡勅勒本今伊前矢小中吉小安伊岡多金金秋細  
人山崎田山木水藤田澤原河庄根村部使河使多村舟島内泉里澤幡井藤田賀井澤間野  
人九鉄郎左亥三安鑄助原亀傳久河原弥城惣念市九釣安貫貫五郎半太兵助夫  
之右太十貢九左安三次乃兵一萬男辰源次太三久賀五衛之八次郎助郎郎門  
（二〇二）承衛夫郎郎衛門助次弥郎丞衛右衛門次次一助郎郎門次藏郎助郎郎衛

咏夷舶至浦賀事

維時癸丑六月丙子。浦港羽檄疾於矢。言是北亞墨利加。巨艦入港。恣虎視。迺知話聖東。鴟梟慾無窮。鎮臺將士目皆裂。巨砲長劍氣吐虹。廟謨有恩不輒擊。腥羶書達成將幕。赤髮碧瞳三百奴。火槍成隊躍上陸。七侯受命扼要地。士怒如火。奮不睡。潮激暗礁響碎筈。皓月在天明旗幟。書生何唯事筆鋒。自有韜略蟠心胸。鞍馬告具卒食蓐。起橫大槊睨飛烽。

甲寅春墨夷重抵浦賀

安政元年

墨夷果來矣。浦賀之馬頭。黑鬼白奴數百隊。聞說彼理又其酋。廟謨從容曾不動。炮臺幾處扼咽喉。令嚴將士夜肅々。更番值敵上戍樓。春月在天旗幟明。羶氣不及鐵砲洲。

浦賀雜詩二首

天末鯨濤外。帆痕落日間。地形連武野。潮勢接房山。劍戟晴相閃。旆旌春正閑。雄藩兵衛肅。長此服夷蠻。望斷三崎浦。水天鶴影迷。潮聲搖島嶼。烽火隔虹蜺。戍衛磨兵刃。圍營逐馬蹄。行人歸不得。決眥立長堤。

題洲崎撈蛤圖

浦賀爲江戶要衝之地。而洲崎則其彎入之處。亦不可以不豫備也。但以其潮汐盈縮之便。沙土深淺之宜。春夏之交。兒女喧沓。以爲遊戲之場。撈蛤之地。或曰宜築土豚以避夷蠻也。宜結木棚以碍夷艦也。余則謂兒女之遊戲。必有嚴於土豚木棚者焉。夫爲臣子者。一日浴太平之澤。則報一日之恩。矧浴數百歲太平之澤。以得今日之安者乎。一旦緩急必有報之者。傳云庶女告天。而飛霜下擊。今之兒女安知不有如此者哉。

## 貞治元年正月の内政

年号	西暦	事蹟	施主	参考事項
文政 5年	1822	1月 20日丸山百之の次男として姫路に生る	忠實	文政4年仁寿山校を開く 9月頃山陽53才にて没す
天保 3年	1832	姫路藩校好古堂に入り藩儒角田心穂に学ぶ		
10年	1839	4月 16日當分の内退官方、句読手伝を仰せ付けられる。 ( 7月 5日上の本役を仰せ付けられる )	忠實	天保6年4月27日忠實隠居する。
11年	1840	4月 15日学問出精につき御褒美として神代、金200円を賜う		
12年	1841	書物預役兼務を仰せ付けられる		6月 14日河合寸翁 75才にて没す
13年	1842	4月 5日学問出精につき2人二土扶持の手當を賜う。 8月好古堂肝煎を仰せ付けられる。		仁寿山校を廃し寄宿舎を大手前御 古堂に移す
14年	1843	2月 26日指南手伝を仰せ付けられる。寢汗煎、書物預役は前の通り。 閏9月 30日兄剛毅病により没す。子なきにより葬儀により丸山家を嗣ぐ。 焼火船を仰せ付けられる。12月 23日書物役を免ぜられる。		
弘化 元年	1844		忠實	3月好古堂増築成り4月 3日開講 の典に忠實自らこれに臨む。 天保暦を實施忠實 10月 10日 37 才江戸において卒す
3年	1846	9月 22日狼狽免ぜられる		
嘉永 元年	1848			5月 27日忠實 70才にて卒す
5年	1850	9月 22日耕種校定統合せ仰せ付けられる。 12月 24日江戸農平坂学校所寄宿舎仰せ付けられる。 同日姫路藩走込合骨折につき金200円を賜う		
4年	1851	正月 18日江戸農平坂学校所へ入門。左藤捨哉(一斎)に師事する		
6年	1853	2月 26日江戸農平坂学校所寄宿舎仰せ付けられる。 6月 8日アメリカ船津賀へ渡航につき瑞公御使。中小姓仰せつけられる。 12月 1日英連合農平坂学校所寄宿舎(特請)仰せ付けられる。	忠實	忠實 8月 10日 25才江戸において 卒す
文政 元年	1854	5月 1日御祝御詔勅御祝餅の節、浴衣三尺帯手拭、外に喜光院様より酒肴料を 賜う。7月 17日校定特請一部下賜される。 12月 21日御内御用にて御懇意斗目一つ及び金5両賜う		
2年	1855	3月 28日落公初の入部につき御祝仰せ付けられ、5月 18日江戸発難。街道中 御乗組相撲めらる。 5月御船道中出精につき金200両賞賜される。 6月 1日好古堂教説仰せ付けられる。 12月 28日数年出精相撲めらるにより追加 10石下賜される。		10月安政大地震 藤田東湖 50才 没す
3年	1856	6月 15日參府御供仰せ付けられる。 8月 15日姫路を発した。 7月 11日江戸在留仰せ付けられる		6月 15日藩公好古堂を改革し、條 規を定める
4年	1857	4月 1日御入部の御供仰せ付けられる。 5月 1日當年は人少につき漸次するよう老中より遣せられる。 12月 24日御内御用にて羽二重小箱; 一枚、金2両2分下賜される		5月下田桑村精ばれる
5年	1858	7月 11日御内御用にて金2万両2分拝領する。		
6年	1859	8月 5日三宅上佐職え召され御組入・1つ拝領する。 9月 11日江戸御発難。御船にて10月 2日始路に就る 12月 23日御内御用にて 御贈御物拝領		
嘉延 元年	1860	4月 2日御手當として金15両下賜	忠實	3月桜田門外の変・忠實 10月 14 日 25才江戸において卒す
文久 元年	1861	4月 9日御院擧御遺物として長井府衣馬県袴拝領する。 11月 5日大書付仰せ付けられる。教授は前の通り		
元治 元年	1864	正月 11日御贈 20石下賜される。 3月 8日御用向有るによって監禁仰せ付けられる。 4月 7日姫路に帰る。 8月特選御院擧御遺物御板付銀助金 300疋下賜される。 11月 29日御内御用向有るによって出直仰せ付けられる		姫路藩甲子の獄
慶應 3年	1867	3月 16日急遽出府仰せ付けられる。御用賄の上 5月 11日姫路に帰る	忠實	忠實 2月 3日隠居す。開亭と考す。 10月大政奉還
明治 元年	1868	正月 12日備前重臣接の儀仰せ付けられ組物と同 14日池田源前守御人數出張 中、應接の指揮せ付けられる。 2月 25日直之助御聘上京御供仰せ付けられる。 在京中介紹役ならびに本 事務を仰せ付けられる。 3月 26日姫路に帰る。 4月 1日直之助御學問御詔勅仰せ付けられる。 同 7日請交番仰せ付けられる。 同 8日直之助は介添役事務仰せ付けられる。	忠實	改元9月 18日 1月 17日勅賜城 12月 10日昌平・開成 2校ならび に医学校に教授をおく。 忠實 5月 20日隠居す。榮堂と号 す 甲子の獄 102人 戊辰の獄 49人

		6月14日蛤園門御番印せ付けられる。 7月8日中小姓頭御取次業務を仰せ付けられる。 11月24日中小姓頭職務役員せ出される。但席はこれまでの通り		
2年	1860	3月義社御門御番方仰せ付けられる。 10月1日名を笠平と改める		忠邦 6月18日姫路藩知事に任せられる
3年	1870	9月8日蛤園門御番手申し付けられる。 12月守備津浦手勤めについて田舎ぐ静存物御手より打附す		
4年	1871	1月28日頃いにより退居		7月14日鹿児島県の調書出る
6年	1873	7月23日松原ひ新宿駅上り官印せ付けられる。 8月17日御内閣総理大臣により北洋提要取扱へ申し付けられる。 同年10月3日光子により觸犯となる。 12月18日大改正有馬橋城より教導隊9名封印し付けられる		
11年	1878	11月26日神道事務局より藩蔵國神道事務分局詔正印仰せ付けられる。		
14年	1881	8月13日内務省より候大講義に補せられる。		
17年	1884	9月17日1等仮試験合格証を兵庫県農業講究所より下附される。 10月1日規制講習期修業成		
18年	1885	9月20日神道官長稻葉正邦より大講義に補せられる		
19年	1886	10月16日鈴東昌吉官禁品取扱申し付けられる。 同19日權少教正に補せられる		
20年	1887	6月16日神道姫路分局内局顧問申し付けられる。 12月26日少教正に補せられる		
21年	1888	11月23日鈴東昌吉取扱申し付けられる		
23年	1890	8月12日兵庫縣見廻課先分所受持委員申し付けられる		
31年	1898	1月1日神農社理局姫路市御前部分局長申し付けられる。 同11日姫路神社及び駒籠兵主神社々祠に奉補せられる。 5月6日病氣にて櫻痴講堂において没す。 葬禮は松山崇經寺流堂の傍に仰る		

H.13.9.12 3回

履歴書

- 一文政五年壬午閏正月二十日姫路ニ生ル  
一天保十年四月十六日當分ノ内偶日方句讀手傳仰付ラル  
一同年七月五日右本役仰付ラル  
一同十一年四月十五日學問出精ニ付御褒美トシテ上下代金三百  
疋ヲ賜フ  
一同十二年十月二十二日書物預役兼勤仰付ラル  
一同十三年四月五日學問出精ニ付御手當トシテ二人扶持ヲ賜フ  
一同年八月好古堂寮肝煎仰付ラル  
一同十四年二月二十六日指南手傳仰付ラル寮肝煎書物預役故ノ  
如シ  
一同年四九月晦日願ノ通り兄源十郎剛毅養子仰付ラル  
一同年十一月二十一日剛毅跡式減少アルベキノ處學問出精ニ付  
特別ノ恩召ヲ以テ百四十石ヲ賜ヒ御焼火之間御番入仰付ラル  
一同年十二月十六日指南手傳勤役中書物料トシテ年金五兩ヲ賜  
フ  
一同年十二月二十三日書物預役ヲ免セラル  
一弘化三年九月二十二日寮肝煎免セラル  
一嘉永三年九月二十二日詩緝校定讀合仰付ラル  
一同年十二月二十四日江戸昌平坂學問所寄宿仰付ラレ四年正月  
十八日御儒者佐藤捨藏様へ入門善生寮へ入ル  
一同年十二月二十四日詩緝校定讀合骨折ニ付金百疋ヲ賜フ  
一同六年二月二十六日昌平坂御學問所書生寮詩文掛仰付ラル  
一同年六月八日亞米利加船浦賀ヘ渡來ニ付君公御供御中小姓代  
仰付ラル右ニ付恩召ヲ以テ御手當金壹兩ヲ賜フ  
一同年十二月朔日御近習席御學問所相手江戸在番仰付ラレ昌平  
坂御學問所退學仰付ラル  
一安政元年正月十七日御讀書ノ節御紙入一つ御手自ヨリ拜領  
一同年二月九日源氏的御相手之節御牛切御書簡袋御烟草入拜領  
一同年五月朔日御溜詰御祝御餅搗之節湯形三尺帶手拭外ニ喜光  
院様ヨリ御手拭酒肴料ヲ賜フ

一 同年同月四日御内御用ニテ黒羽二重御紋服拜領

一 同年同月十三日御餅搗之節獻上物ニ付金百疋ヲ賜フ

一 同年七月十七日校定詩緝一部下賜

一 同年十二月二十一日御内御用ニテ御饅斗目一ツ及ヒ金五兩ヲ

一 安政二年正月二日思召ヲ以テ下緒美濃紙紋柄一帖拜領

一 同年三月二十八日御歸城ニ付御供仰付ラレ御道中御次番相勤ム

一 同年三月某日御讀書ノ節御筆洗一ツ拜領

一 同年四月二十五日御内御用ニテ袴一ツ帷子一ツ拜領

一 同年五月御歸道中出精ニ付金二百疋賞賜

一 同年八月十七日御手自唐金天祿水入一ツ拜領

一 同年十二月十五日御内御用ニテ御紋服拜領

一 同年同月十八日御内御用ニテ金二百疋拜領

一 同年同月二十八日數年出精相勸候ニ付高增十石下賜

一 同三年正月十九日從來勝手向不如意ニ付御手當トシテ金三十  
七兩三分二朱下賜

一 同年二月十三日御内御用ニテ伊賀袴地一反下賜

一 同年五月十日御内御用ニテ帷子襦袴拜領

一 同年六月朔日教授兼勤仰付ラル

一 同年七月三日御手自ヨリ御肩衣一ツ拜領

一 同月十五日御參府御供仰付ラル

一 同年七月十一日江戸在番仰付ラル

一 同月十二日御内御用ニテ紋付袴金二百疋下賜

一 同年十二月二十六日御内御用ニテ御下着一枚金二百疋拜領

一 同四年四月朔日御歸城御供仰付ラル

一 同年五月四日御内御用ニテ御馬乘袴帷子拜領

一 同年七月十三日當年ハ御人少ニ付御暇不被爲在御滞府ニ相成  
在番長々ニ付在番中一ヶ年金五兩ヲ・下賜

一 同年十二月二十四日御内御用ニテ羽二重小袖壹枚金二兩二分  
下賜

一 同五年五月二日御内御用ニテ袴一ツ紬小袖一ツ拜領

一 同年七月十一日御内御用ニテ金二兩二分拜領

一 同六年五月二日御内御用ニテ小袴一ツ拜領

一 同年八月五日三宅土佐様へ召サセラレ御紙入一ツ拜領

一 同年九月十一日御發駕御供ニテ江戸出立十月二日姫路ニ歸ル

一 同年十二月二十三日御内御用ニテ御肩衣袴拜領

一 萬延元年四月二日御手當トシテ金拾五兩下賜

一 同月九日御内御用ニテ馬乘袴金二百疋拜領

一 文久元年四月九日 顯徳院様御遺物トシテ長袴肩衣馬乘袴拜領

一 領同年十一月五日大目付役仰付ラレ教授如故

一 元治元年正月十一日高増貳拾石下賜

一 同年三月八日御用向有之出京仰付ラル

一 其年四月二十七日歸城

一 同年八月某日修猷院様御遺物御紋付黒紺金三百疋下賜

一 同年十一月二十九日御内意御用向有之出府仰付ラレ翌二年正

月十四日御用濟ニ付歸城

一 同月二十七日江戸表ニ於テ肩衣袴拜領

一 豊應三年三月十六日急速出府仰付ラレ御用濟ノ上五月十一日

一 歸城

一 同四年戊辰正月十二日備前軍使應接之儀仰付ラレ以後引續應

一 握相勤

一 同年正月十四日池田備前守様御人數出張中掛仰付ラル

一 同年二月十五日御用向有之急速京都ヘ立寄出府仰付ラル

一 同月二十九日直之助様御上京御供仰付ラル御在京中介添役并

ニ本メ兼勤仰付ラル

一 其年三月二十六日歸城

一 同年四月朔日直之助様御學問御世話仰付ラル

一 同年四月七日隣交掛仰付ラル

一 同月二十日御紋付麻野羽織拜領

一 同年六月十四日繪闌門御番仰付ラル

一 同年七月八日御中小姓組頭御取次兼勤仰付ラル

一 同年十一月二十四日御中小姓組頭廢役仰出サル但席是迄之通

明治二年三月總社門御番方仰付ラル

一 同年十月朔日名ヲ雲平ト改ム

一 同三年九月八日御學問御相手申付ラル

一 同年十二月御學問御相手相勤候ニ付醜漿クソシ御紋付御召物一枚御手自ヨリ拜領

一 同四年正月二十八日願ニヨリ隱居

一 同六年七月二十三日松原八幡神祠官被仰付

一 同八年八月十七日飾磨縣御雇ヲ以テ地誌提要取調申付ラル其年十月三日取調濟解雇

一 同年十二月十八日大教正有馬賴威ヨリ教導職九級試補申付ラル

一 同年六月二日教部省ヨリ中譜義ニ兼補セラル

一 同十一年十一月二十八日神道事務局ヨリ播磨國神道事務分局副長擔任申付ラル

一 同十四年八月十三日内務省ヨリ權大講義ニ補セラル

一 同十七年九月十七日一等假試驗合格證ヲ兵庫縣皇典講究分所ヨリ下附セラル

一 同年十月一日觀海講堂新築落成

一 同十八年九月二十日神道管長稻葉正邦ヨリ大講義ニ補セラル

一 同十九年十月十六日飾東郡祠官掌副取締申付ラル

一 同年十月十九日權少教正ニ補セラル

一 同二十年六月十六日神道姫路分局内局顧問申付ラル

一 同二十年十二月二十六日少教正ニ補セラル

一 同二十一年十一月二十三日飾東郡祠官掌取締擔任申付ラル

一 同二十三年八月十二日兵庫縣皇典講究分所受持委員申付ラル

一 同三十一年一月一日神職監理局姫路市飾磨郡分局长申付ラル

一 同年一月十一日姫路神社及射楯兵主神社々司ニ兼補セラル

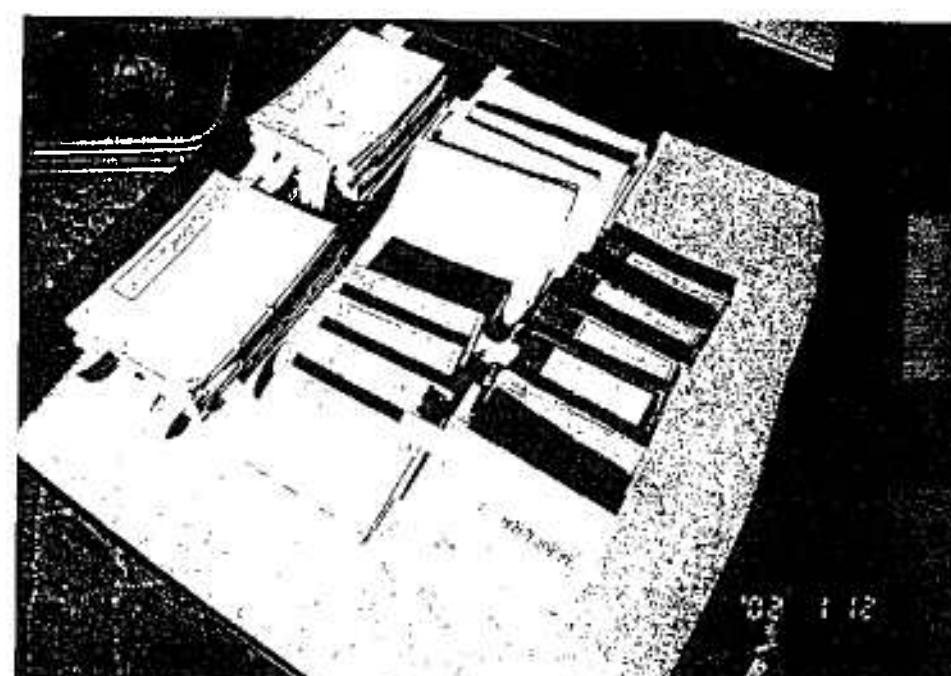
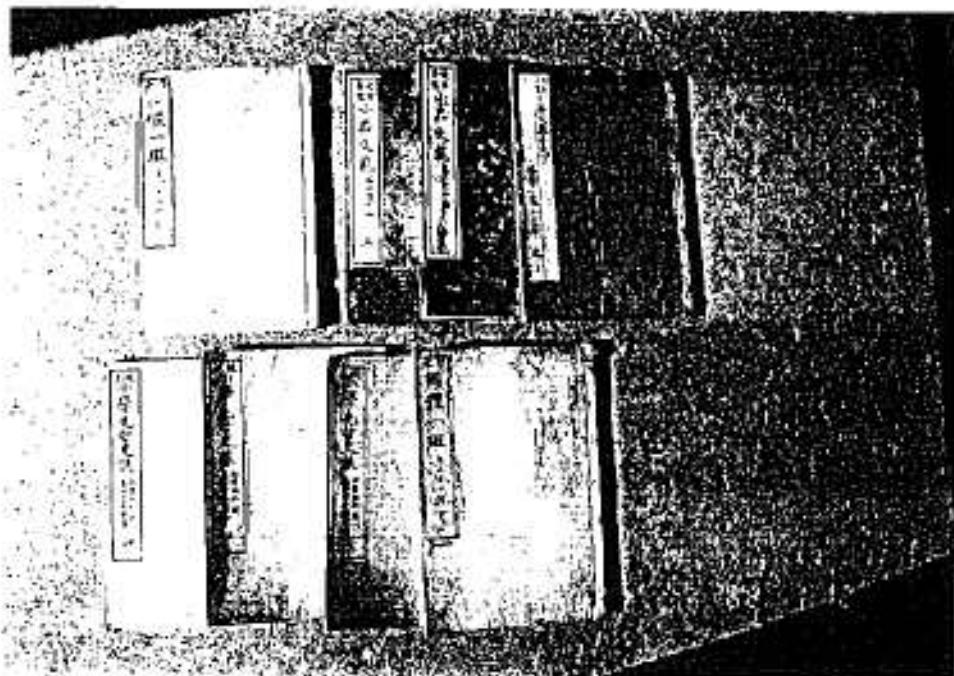
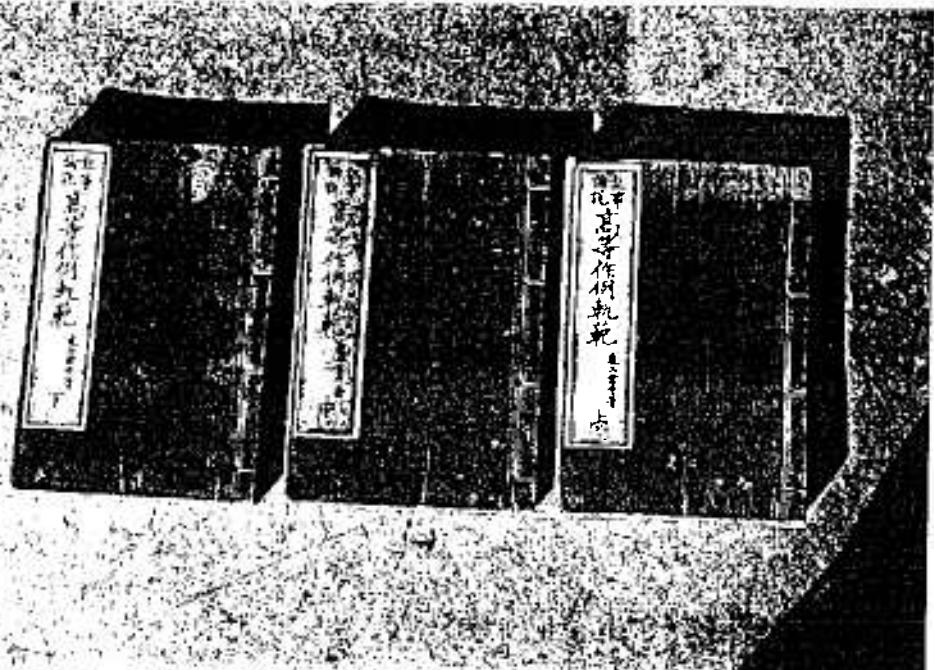
一 同三十二年四月二十六日射楯兵主神社々司兼務ヲ免セラル

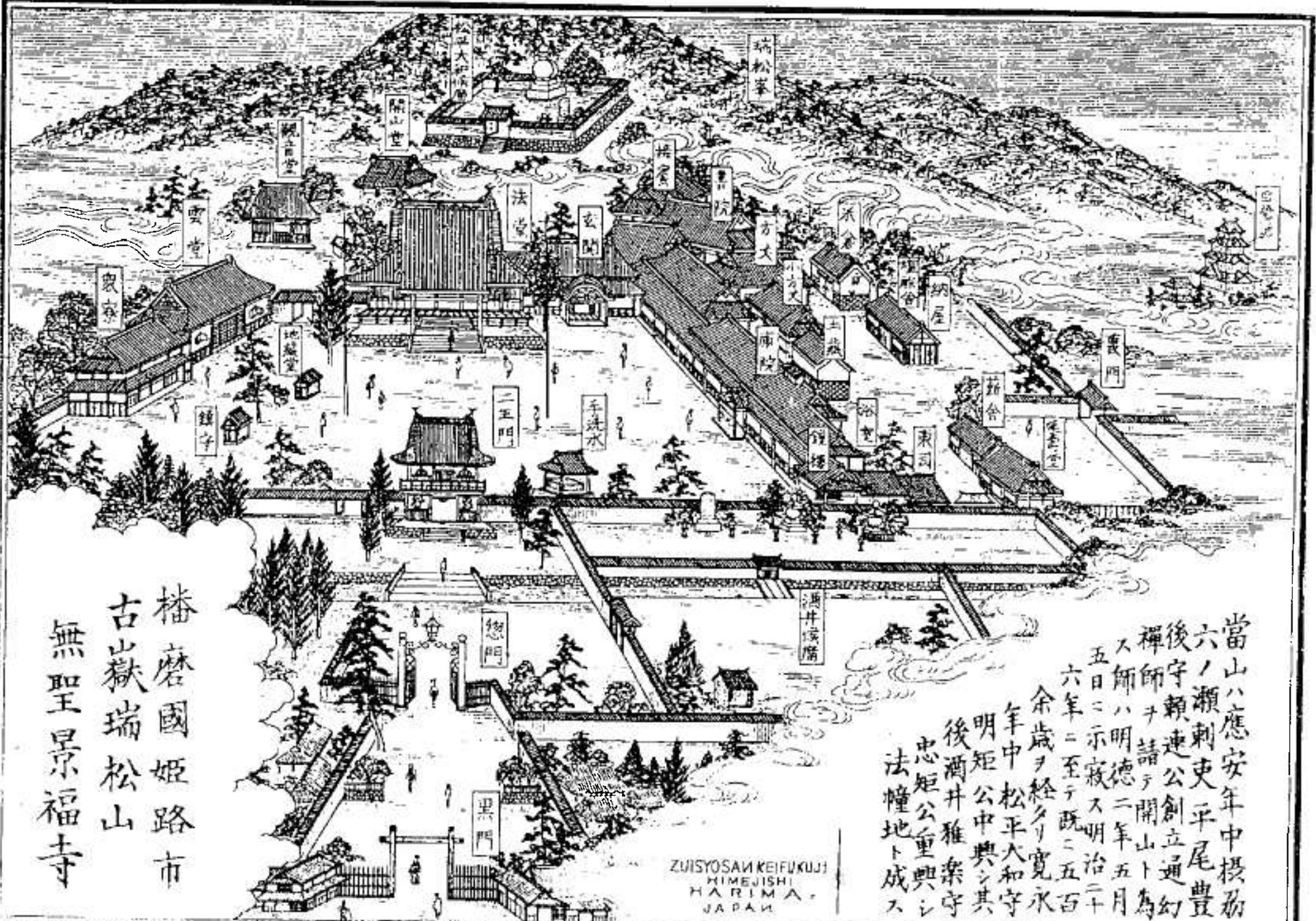
一 同三十二年五月六日病氣ニテ觀海講堂ニ於テ歿ス其十一日姫路瑞松山先塋ノ次ニ葬ル

## 龜山雲平役職名

一 松原八幡神社祠官	明治六、七
一 教導職九級試補	明治六、十二
一 中講義申付らる	明治七、六
一 播磨国神道分局長	明治十四、十一
一 権大講義申付らる	明治十八、八
一 兵庫県皇典講究分所一等仮試験合格証	明治十七、九
一 大講義申付らる	明治十九、九
一 権少教正に補せらる	明治十九、十
一 飾東郡祠官掌副取締	明治二十、六
一 神道姫路分局内局顧問となる	明治二十一、十二
一 少教正に補せらる	明治二十一、十二
一 姫路市飾磨郡社司社掌取締	明治二十一、十二
一 兵庫県皇典講究分所受持委員となる	明治二十三、八
一 姫路市飾東西郡社司社掌取締	明治二十四、十二
一 神堂教導職尋常検定委員に命ず	明治三十、十二
一 姫路市飾磨郡神職監理分局長	明治三十一、一
一 射楯兵主神社社司 兼務	明治三十一、一
一 姫路神社社司 兼務	明治三十一、一

# 龜山雲平の出版物 (著書)





播磨國姫路市  
古山嶽瑞松山

ZUISYOSAN KEIFUKU  
HIMEJISHI  
HARIMA -  
JAPAN



延路市飾東  
所郡社司社  
掌盤理少司

姬路市飾東  
磨郡神職飾  
監理今局長  
龜山雲平

延路市飾東  
西社掌取社  
重山雲平

延路市飾東  
縣社射循  
社至

延路市飾東  
縣社射循  
龜山雲平

縣社松原  
幡神社  
社掌之印

